

平成 30 年 6 月 7 日現在

機関番号：16102

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2015～2017

課題番号：15K04128

研究課題名(和文) 学校予防教育プログラムによるインプリシットとエクスプリシット心的特性の変容比較

研究課題名(英文) Comparisons of changes in implicit and explicit psychological characteristics by school-based prevention education programs

研究代表者

山崎 勝之 (Katsuyuki, Yamasaki)

鳴門教育大学・大学院学校教育研究科・教授

研究者番号：50191250

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 3,200,000円

研究成果の概要(和文)：本研究では、セルフ・エスティーム(SE)とアフェクトを対象に、インプリシットとエクスプリシット特性の学校予防教育による変容比較を行った。まず各特性の測定法を開発し、SEでは潜在連合テストと質問紙、アフェクトでは半投影法と質問紙による合計4つの測定法を完成させた。そして、既存の教育のうち、SEには「自己信頼心(自信)の育成」、アフェクトには「感情の理解と対処の育成のプログラム」を実施した。その結果、SEでは、適応的特性であるインプリシット特性(自律的SE)が向上し、不適応的特性であるエクスプリシット特性(他律的SE)は無変化であり、アフェクトではポジティブ・アフェクトの向上が確認された。

研究成果の概要(英文)： In this study, changes in implicit and explicit characteristics of self-esteem and affect that were produced by school-based prevention programs were compared. First, tools for assessing each characteristic were developed, which completed an implicit association test and a questionnaire for self-esteem, and a semi-projection method and a questionnaire for affect. Next, a prevention program for enhancing self-confidence regarding self-esteem and another one for cultivating understanding and regulation of emotions for affect were utilized to test the changes. Resultantly, adaptive implicit feature of self-esteem (autonomous self-esteem) was improved, and its maladaptive explicit feature (heteronomous self-esteem) did not change, while both implicit and explicit positive affect were enhanced by the program.

研究分野：発達健康心理学

キーワード：セルフ・エスティーム アフェクト インプリシット特性 エクスプリシット特性 学校予防教育 児童

1. 研究開始当初の背景

脳科学や心理学における近年の実証的研究の特徴の1つは、無意識の機能の再強調と情動や感情の機能の重視であろう。前者では、我々の思考、認知、行動など生活上の営みのほとんどは無意識によって行われることを斬新な方法によって明らかにしている (e.g., Libet, 2004)。また、後者については多方面で情動・感情の重視が確認されるが、脳科学の一領域では、たとえばソマティックマーカー (somatic marker) 仮説 (Damasio, 1994) のように、無意識にある情動(主として身体反応)が高次な心的営みを制御していることを示している。

このような動向から誕生したのが、学校で実施する健康と適応のためのユニバーサル予防教育(トップ・セルフ, TOP SELF: Trial Of Prevention School Education for Life and Friendship; たとえば、山崎, 2013)で、無意識領域にある情動と情動が意識に上り生じる感情を十分に喚起し、その基盤の上に学習目標としての心的特性を全体として記憶化させることを目指した教育である。この教育は子どもを引きつける教育方法を持ち、教育効果が高いことから、現在全国的な広がりを見せている。

しかし、この予防教育の効果は、質問紙などを用いた意識を仲介しての測定が中心で、無意識領域での変化を直接的にとらえる試みは途に就いたばかりである。心理学や精神医学での無意識領域にある特徴の測定といえば、投影法や半投影法の測定方法を用いることが多かったが、評価と採点に時間を要し、また客観性にも欠けていた。これらの問題を克服して開発されたのが、インプリシット (implicit) な特性(状態)の測定方法である。インプリシット特性(状態)は、前意識的な表象をとらえているとされるが (Quirin et al., 2011)、無意識から意識への展開を前提とする学校予防教育では最適な測定水準になる。このインプリシット特性の測定では、これまでにセルフ・エスティーム (Self-Esteem: SE) についていくつかの測定方法が開発され、測度が充実している (e.g., Buhrmester et al., 2011)。また、インプリシット正負感情(affect, アフェクト)についての尺度も開発が行われ (Quirin et al., 2009)、日本の児童用も開発されている (内田ら, 2014)。学校予防教育プログラム・トップ・セルフは多数のプログラム群からなるが、中でも「自己信頼心(自信)の育成」と「感情の理解と対処の育成」は充実している。この2つのプログラムの目標はSEと感情の理解と対処の健全化であり、この点においてはインプリシットなSEと正負感情測定法を利用し、実際にこれらのプログラムがインプリシット特性にまで教育効果を波及させるのか、またその場合、インプリシットとエクスプリシット (explicit) の関係はどのようなものか早急に検討が待たれている。またこのことは、インプリシットとエク

スプリシット特性の不一致状況によっては、どちらか単独測定の場合では推測できない健康・適応像を示すことが指摘されており (Kernis et al., 2008; Spencer et al., 2005)、喫緊の課題となる。

なお、SEについては、近年概念が混沌としており、新規な概念が複数提起されている (e.g., Deci & Ryan, 1995; Kernis, 2003; Yamasaki et al., 2017)。とりわけ、山崎らによる、SEを2分し、自律的SEと他律的SEの概念弁別は発達過程を考慮した包括的な概念として注目される。そして、自律的SEこそが健康と適応をもたらす望ましいSEで、他律的SEはそれらを損なうSEとされている。またこの概念区分については、山崎らは自律的SEは質問紙では測定できず、インプリシットな状態で測定する必要があり、他方、他律的SEは質問紙で測定できるとしている。このことから、本研究でインプリシットSEという場合は自律的SEを、エクスプリシットSEという場合は他律的SEを意味していることになる。

2. 研究の目的

まず第1に、インプリシットならびにエクスプリシットなSEとアフェクトを児童で測定できる方法を確立する必要がある。このうち、エクスプリシット・アフェクトはすでにPANAS (Positive and Negative Affect Schedule) 尺度の児童用日本版が標準化されている (Yamasaki et al., 2006) のでそれを利用できるが、他の測定法については開発を行う必要がある。

第2に、測定方法が確立された後は、実際に既存の予防教育プログラムを実施し、その教育効果をエクスプリシットとインプリシット特性の変化からとらえる。この場合は、SEには「自己信頼性(自信)の育成」を、アフェクトには「感情の理解と対処の育成」を適用することになる。SEについては、自律的(インプリシット)SEが望ましいSEであることから、教育により高まり、問題のある他律的(エクスプリシット)SEは低まることが予想される。この点、アフェクトについては、両アフェクトがどのような変化を示すのかは仮説を持たない。

第3に、SEとアフェクトと健康・適応との関係を調べる。SEにしてもアフェクトにしても、健康と適応の関係を調べた研究は多いが、本研究では概念と測定方法に新規性があるので、教育効果などによってもたらされる変化が実際に健康と適応にどうつながるかを予測できる基礎データを得ておきたい。

第4に、得られた研究成果をもとに学校において、特にインプリシット特性についての新規な概念、測定法、そして教育方法を普及させる方途を検討したい。

3. 研究の方法

(1) 研究1 インプリシットSE (自律的

SE)を測定できる児童用紙筆版潜在連合テストを開発する。まず、円滑な運用を保証する方法の詳細を構築する。その後、多人数の児童(4~6年生)に適用し、基礎データ(男女や学年差など)、得点分布、信頼性(内的整合性)を確認する。そして、得点の高低児童を抽出し、それらの児童を担当教師が自律的SEの特徴の観点から評価することにより、妥当性を確認し、標準化を完了する。

(2)研究2 エクスプリシットSEの測定法にはすでに児童用 Rosenberg 質問紙が作成されている。しかし、既存の質問紙は妥当性を中心に問題が少なくないので、再度児童用の Rosenberg 質問紙を作成することを試みる。まず、成人用の原版を土台とし、既存の複数の日本語版児童用尺度を参照し、的確な訳語を導出し、質問紙の原型を作成する。その後、4年生以上の児童に実施し、因子的妥当性、基礎データ(男女や学年差など)、得点分布、信頼性(内的整合性)を確認する。そして、教師ノミネート法を用いて、エクスプリシットSEの高低の児童を抽出し、質問紙得点が高かろうと低かろうとを確かめることができるかどうかの観点から妥当性を検討する。

(3)研究3 すでに児童用インプリシット・アフェクト測定尺度は内田ら(2014)により作成されている。しかし、その尺度は妥当性を中心に問題があり改訂が必要になっている。そこで、構成項目を再吟味し修正した上で、同様のテストの信頼性と妥当性を検討する。信頼性は、因子的妥当性を経て内的整合性の観点から、妥当性はQ-U質問紙(河村・田上,1997)を基準関連妥当性として使用する。

(4)研究4 インプリシットSE(自律的SE)を育成できると予想される予防教育「自己信頼心(自信)の育成」を小学校4年生に実施し、作成されたインプリシット潜在連合テスト(インプリシットSE,自律的SE測定用)とRosenberg質問紙(エクスプリシットSE用)を教育実施前後に適用してその教育効果を比較する。

(5)研究5 予防教育「感情の理解と対処の育成」を小学校6年生に実施し、その効果をインプリシットとエクスプリシット・アフェクトの観点からみる。また同時に、健康と適応の関連を調べる。インプリシット・アフェクトは児童用正負インプリシット・アフェクトテストを、エクスプリシット・アフェクトは児童用PANAS質問紙を用いる。健康・適応尺度はQ-U質問紙を用いる。

(6)研究6 エクスプリシットSEとしての他律的SE質問紙を作成する。その質問紙は、全体他律的SEの観点から測定する。他律的SEの概念を精査した上で質問項目を作成し、質問紙の体裁を整え最初の版を完成する。その質問紙を小学校4~6年生に実施し、因子的妥当性、信頼性としての内的整合性、教師評定による妥当性の検討から標準化を行う。教師評定はノミネート法で他律的SE

の高低として抽出された児童を質問紙得点が弁別できるかどうかの観点から検討する。

(7)研究7 インプリシットならびにエクスプリシットSEと健康・適応の関係を検討する。インプリシットSE(自律的SE)は児童用の潜在連合テストを、エクスプリシットSE(他律的SE)は児童用全体他律的SE質問紙を使用する。健康・適応については、独自に作成した向社会性ビニエツト法と心理的ストレス尺度(長根,1991)を使用する。

(8)研究8 上記の研究を受けて、学校におけるインプリシット特性(SEとアフェクト)の概念、測定方法、教育方法の導入を円滑に行う手段とプランを構築する。

4. 研究成果

3年間の研究成果は、インプリシットとエクスプリシットのSEならびにアフェクト測定方法の確立、予防教育実施における両SEならびにアフェクトの変化の確認、同様に健康・適応との関連の確認、そして、学校におけるインプリシットとエクスプリシットのSEならびにアフェクトの概念、測定法、教育方法の導入方法の確立に集約される。

(1)インプリシットとエクスプリシットSEならびにアフェクトの測定法の確立

児童用のインプリシットSE(自律的SE)の測定方法として紙筆版潜在連合テストを作成し、信頼性と妥当性の確認を経て標準化を完了した。信頼性は、平行検査法を用い、妥当性は教師評定法を用いた。

また児童用のエクスプリシットSE(他律的SE)は質問紙として、全体他律的SEの質問紙を作成した。1因子構造であることを因子分析で確認し、得点分布と基礎データ(男女ならびに学年差など)の確認後、内的整合性による信頼性ならびに教師ノミネート法による妥当性を確認し、標準化を完了した。

そして、エクスプリシット・アフェクトの児童用の測定方法は児童用PANAS尺度として完成されているので、インプリシット・アフェクト測定法の開発を行った。インプリシット・アフェクト測定法は児童用正負インプリシット・アフェクトテストとしてその最初の版が作成されているが、因子を構成する項目に問題があったので、項目を修正して信頼性と妥当性を再度検討した。その結果、正負のインプリシット・アフェクト因子が確認され、内的整合性も許容範囲の高さを示し、Q-Uとの関連でも基準関連妥当性の高さがほぼ確認され、使用できるテストになった。

(2)予防教育効果としてのインプリシットとエクスプリシット特性の変化

トップ・セルフの一連のプログラム群のうち、「自己信頼心(自信)の育成」を実施し、SEの変化を確認した。また、「感情の理解と対処の育成」プログラムによりアフェクトの変化を確認した。その結果、SEは、潜在連合テストで測定された健康・適応を高めるインプリシットSE(自律的SE)のみが高まり、

健康・適応を高める要素と低下させる要素が混在するエクスプリシット SE (他律的 SE) を測定すると考えられる Rosenberg 尺度得点は変化がなかった。またアフェクトに関しては、エクスプリシット・アフェクトでは、正アフェクトが高まり、負アフェクトが低下し、インプリシット・アフェクトでは、正アフェクトが高まり、負アフェクトは変化がなかった。

(3) インプリシットとエクスプリシットの SE ならびにアフェクトの健康・適応との関連
まず、SE と健康・適応との関係では、自律的 SE (潜在連合テストによる) と他律的 SE (全体他律的 SE 質問紙による) の観点から SE を測定し、向社会性 (ビニエツト法による) の観点から健康・適応状況を測定した。また、他律的 SE との関連に限り心理的ストレス尺度との関連を調べた。

その結果、自律的 SE は一部の向社会性と正に関連し、他律的 SE は対人ストレスと正に関連することが明らかになり、自律的 SE の健康と適応への増進ならびに他律的 SE の健康と適応への阻害の一端が明らかになった。

(4) 学校におけるインプリシット概念、測定法、教育方法の導入

まず、学校での SE を中心とした概念と教育方法の在り方全般を平易に伝えるための書籍を刊行した。そして、その書籍とともに、研修や講演を実施した。さらに、各種 SNS を通じてこの新規概念と教育の重要性の発信を行った。

同時に、学校側からの質問にも直接答え、希望する学校には教育方法の説明と導入実施方法を直接説明し、今後の実施への道筋を明らかにした。

< 引用文献 >

- Buhrmester, M. D., Blanton, H., Swann, W. B., Jr. (2011). Implicit self-esteem: Nature, measurement, and a new way forward. *Journal of Personality and Social Psychology, 100*, 365-385
- Damasio, A. R. (1994). *Descartes' error: Emotion, reason, and the human brain*. New York: Putnam. 田中三彦 (訳) (2010). *デカルトの誤り - 情動, 理性, 人間の脳 - ちくま学芸文庫 (新訳文庫版)*
- Deci, E. L., & Ryan, R. M. (1995). Human autonomy: The basis for true self-esteem. In Kernis, M. H. (Ed.), *Efficacy, agency, and self-esteem* (pp. 31-49). New York: Plenum Press.
- Kernis, M. H. (2003). Toward a conceptualization of optimal self-esteem. *Psychological Inquiry, 14*, 1-26.
- Kernis, M. H., Lakey, C. E., & Heppner, W. L. (2008). Secure versus fragile high self-esteem as a predictor of verbal defensiveness: Converging findings across three different

- markers. *Journal of Personality, 76*, 477-512.
- Libet, B. (2004). *Mind time: The temporal factor in consciousness*. Cambridge, MA: Harvard University Press. 下條信輔 (訳) (2005). *マインド・タイム - 脳と意識の時間 - 岩波書店*
- 長根光男 (1991). 学校生活における児童の心理的ストレス分析 - 小学校 4, 5, 6 年生を対象にして - *教育心理学研究, 39*, 182-185.
- Quirin, M., Bode, R. C., & Kuhl, J. (2011). Recovering from negative events by boosting implicit positive affect. *Cognition and Emotion, 25*, 559-570.
- Quirin, M., Kazén, M., & Kuhl, J. (2009). When nonsense sounds happy or helpless: The Implicit positive and Negative Affect Test (IPANAT). *Journal of Personality and Social Psychology, 97*, 500-516.
- Spencer, S. J., Jordan, C. H., Logel, C. E. R., & Zanna, M. P. (2005). Nagging doubts and a glimmer of hope: The role of implicit self-esteem in self-image maintenance. In A. Tesser, J. V. Wood, & D. A. Stapel (Eds.), *On building, defending, and regulating the self: A psychological perspective* (pp. 153-170). New York: Psychology Press.
- 内田香奈子・福田衣利子・山崎勝之 (2014). 児童用インプリシット感情 (affect) 測定方法の開発 - 質問紙の原型の開発と信頼性・妥当性の最初の検討 - *鳴門教育大学研究紀要, 29*, 160-168.
- 山崎勝之 (2013). トップ・セルフの教育目標 鳴門教育大学予防教育科学センター 予防教育科学に基づく「新しい学校予防教育」(第2版)(pp. 17-47) 鳴門教育大学
- Yamasaki, K., Katsuma, R., & Sakai, A. (2006). Development of a Japanese version of the PANAS-C. *Psychological Reports, 99*, 535-546.
- Yamasaki, K., Uchida, K., Yokoshima, T., & Kaya, I. (2017). Reconstruction of the conceptualization of self-esteem and methods for measurement: Renovating self-esteem research. *International Journal of Psychology and Behavioral Sciences, 7*, 135-141.
5. 主な発表論文等
(研究代表者, 研究分担者及び連携研究者には下線)
- [雑誌論文](計13件)
- 山崎勝之・横嶋敬行・賀屋育子・山口悟史・内田香奈子 (2018). 他律的(随伴性)セルフ・エスティームの概念と測定法 鳴門教育大学研究紀要, 33, 1-15. (査読無)
 - 山崎勝之・内田香奈子・横嶋敬行・賀屋育子・道下直矢 (2018). 「自律的セルフ・エスティーム」を育成するユニバーサル予防教育の教育目標の確立と授業方法の開発方針

鳴門教育大学学校教育研究紀要, 32, 91-100. (査読無)

3. 横嶋敬行・山口悟史・賀屋育子・内田香奈子・山崎勝之 (2018). 児童用の紙筆版セルフ・エスティーム潜在連合テスト - 実施の手順と採点方法の詳細の紹介, そして課題順序カウンターバランスの削除可能性の検討 - 鳴門教育大学学校教育研究紀要, 32, 101-110. (査読無)

4. 賀屋育子・山口悟史・横嶋敬行・内田香奈子・山崎勝之 (2018). 児童用の他律的(随伴性)セルフ・エスティーム尺度の開発 - 尺度の信頼性と妥当性の検討, そして教育への適用の考察 - 兵庫教育大学教育実践論集, 19, 1-12. (査読有)

5. 横嶋敬行・賀屋育子・内田香奈子・山崎勝之 (2018). ユニバーサル学校予防教育「自己信頼心(自信)の育成」プログラムの効果 - 児童用紙筆版セルフ・エスティーム潜在連合テストを用いた教育効果の検討 - 学校保健研究, 60, 5-17. (査読有)

6. Yamasaki, K., Uchida, K., Yokoshima, T., & Kaya, I. (2017). Reconstruction of the conceptualization of self-esteem and methods for measurement: Renovating self-esteem research. *International Journal of Psychology and Behavioral Sciences*, 7, 135-141. (査読有)

7. 山崎勝之・横嶋敬行・内田香奈子 (2017). 「セルフ・エスティーム」の概念と測定法の再構築 鳴門教育大学研究紀要, 32, 1-19. (査読無)

8. 横嶋敬行・内山有美・内田香奈子・山崎勝之 (2017). 児童用の紙筆版自尊感情潜在連合テストの開発 - 信頼性ならびに Rosenberg 自尊感情尺度と教師による児童評定を用いた妥当性の検討 - 兵庫教育大学教育実践学論集, 18, 1-13. (査読有)

9. 内田香奈子・山崎勝之 (2017). 学校予防教育プログラム「感情の理解と対処の育成」 - 小学校5年生における授業内容について - 鳴門教育大学研究紀要, 32, 20-85. (査読無)

10. 横嶋敬行・村上祐介・内田香奈子・山崎勝之 (2016). ユニバーサル学校予防教育「自己信頼心(自信)の育成」プログラムの効果 - 小学校3年生を対象にし, 教育目標達成後の波及効果を考慮して - 兵庫教育大学教育実践学論集, 17, 11-23. (査読有)

11. 山崎勝之・内田香奈子・横嶋敬行・内山有美 (2016). 無意識と意識, そして, インプリシット心的特徴 鳴門教育大学研究紀要, 31, 1-18. (査読無)

12. 内田香奈子・横嶋敬行・山崎勝之 (2016). 児童用インプリシット感情尺度 (IPANAT-C) の改善 - 信頼性と妥当性の再検討 - 鳴門教育大学研究紀要, 31, 19-28. (査読無)

13. Yamasaki, K., Murakami, Y., Yokoshima, T., & Uchida, K. (2015). Effectiveness of a school-based universal prevention program for enhancing self-confidence: Considering the extended effects associated with achievement of

the direct purposes of the program. *International Journal of Applied Psychology*, 5, 152-159. (査読有)

[学会発表](計15件)

1. Yamasaki, K., Yokoshima, T., Kaya, I., & Uchida, K. (2017). Relationships between two types of self-esteem measured utilizing the Implicit Association Test and Rosenberg's scale: Comparisons in the intervention for cultivating autonomous self-esteem. International Academic Conference on Social Sciences, Singapore, Dec. 20, 2017.

2. Uchida, K., Yokoshima, T., Kaya, I., & Yamasaki, K. (2017). Effects of implicit and explicit affect on emotion-focused coping. International Academic Conference on Social Sciences, Singapore, Dec. 20, 2017.

3. 山崎勝之 (2017). 新しい学校予防教育 - いじめから学力問題まで 子ども守り育てる総合教育 - (シンポジウム「子どもの bien-être に関する保障・予防教育」話題提供) 日仏教育学会 2017 年度研究大会, 鳴門教育大学 2017 年 10 月 21 日

4. 山崎勝之 (2017). 新概念と評価方法に基づく, これからのセルフ・エスティーム (シンポジウム「『セルフ・エスティーム』研究の抜本的再考(3) 本当のセルフ・エスティーム教育と評価方法とは?」話題提供) 日本教育心理学会 名古屋国際会議場 2017 年 10 月 8 日

5. 横嶋敬行・賀屋育子・内田香奈子・山崎勝之 (2017). ユニバーサル学校予防教育「自己信頼心(自信)の育成」プログラムの効果 - 児童用紙筆版セルフ・エスティーム潜在連合テストを用いた自律的セルフ・エスティームへの教育効果の検討 - 日本教育心理学会 名古屋国際会議場 2017 年 10 月 7 日

6. 賀屋育子・山口悟史・横嶋敬行・内田香奈子・山崎勝之 (2017). 児童用の他律的(随伴性)セルフ・エスティーム尺度の開発 - 尺度の信頼性と妥当性の検討, そして教育への適用の考察 - 日本教育心理学会 名古屋国際会議場 2017 年 10 月 8 日

7. 山崎勝之 「セルフ・エスティーム」の概念と測定方法の刷新 (シンポジウム「『セルフ・エスティーム』研究の抜本的再考(2) - セルフ・エスティームの概念と測定法を刷新する -」話題提供) 日本心理学会 久留米シティプラザ 2017 年 9 月 22 日

8. 横嶋敬行・内山有美・内田香奈子・山崎勝之 (2017). 児童用の紙筆版セルフ・エスティーム潜在連合テストの開発 - 信頼性ならびに教師による児童評定を用いた妥当性の検討 - 日本心理学会 久留米シティプラザ 2017 年 9 月 21 日

9. Uchida, K., Yokoshima, T., Uchiyama, Y., & Yamasaki, K. (2017). The effects of implicit and explicit affect on emotional coping and school adjustment: A short-term prospective study via a

universal prevention program. International Convention of Psychological Science, Vienna, Australia, Mar. 25.

10. Yamasaki, K., Umakoshi, A., & Uchida, K. (2017). Effectiveness of a school-based universal program for bullying prevention: Considering the extended effects associated with achievement of the direct purposes of the program. International Convention of Psychological Science, Vienna, Australia, Mar. 24.

11. 横嶋敬行・内山有美・内田香奈子・山崎勝之 (2016). 児童用の Rosenberg 自尊感情尺度の再作成 - 項目の修正と教師による児童評定を用いた妥当性の検討 - 日本教育心理学会 サンポートホール高松 2016年10月9日

12. 内田香奈子・横嶋敬行・内山有美・山崎勝之 (2016). 学校主導による学校予防教育 (短縮版) の実施と効果 - トップ・セルフ「感情の理解と対処の育成」プログラムの実施を通して - 日本教育心理学会 サンポートホール高松 2016年10月9日

13. Uchida, K., Yokoshima, T., & Yamasaki, K. (2016). Effects of implicit affect on emotional coping and school adjustment: A short-term longitudinal study with a school-based universal prevention program for enhancing emotional abilities. European Psychiatric Association, Madrid, Mar. 15, 2016.

14. Yamasaki, K., Murakami, Y., Yokoshima, T., & Uchida, K. (2016). Effectiveness of a school-based universal prevention program for enhancing self-confidence: Considering the extended effects associated with achievement of the direct purposes of the program. European Psychiatric Association, Madrid, Mar. 13, 2016.

15. 内田香奈子・山崎勝之 (2015). 児童における他者への感情調整方略が学校適応に及ぼす影響 日本心理学会 名古屋国際会議場 2015年9月23日

〔図書〕(計1件)

1. 山崎勝之 (2017). 自尊感情革命 - なぜ、学校や社会は「自尊感情」がそんなに好きなのか? 福村出版

6. 研究組織

(1)研究代表者

山崎 勝之 (YAMASAKI, Katsuyuki)
鳴門教育大学・大学院学校教育研究科
・教授
研究者番号: 50191250

(2)研究分担者

内田 香奈子 (UHKIDA, Kanako)
鳴門教育大学・大学院学校教育研究科
・准教授
研究者番号: 70580835

(3)連携研究者

内山 (安藤) 有美 (UCHIYAMA, Yumi)
四国大学・生活科学部児童学科・専任講師
研究者番号: 60735843